

吾亦紅

池松 孝子

吾亦紅は八月から十月にかけて野山で目にするバラ科の多年草だが、なぜこれがバラ科なのか分からない。たくさんの細い茎が枝分かれした先に赤い穂をつける。暗紅色で花びらが無い独特の花だ。さらに普通、花は下から上へと咲いていくのだが上から下へと咲いていく。これもまた珍しい。それに花弁は退化していて見えない。

吾亦紅は吾木香とも書く。線香の材料にもなる木香と香りが似ているからだという説もある。しかしこの花の香りは木香と表されるようなものではないと思う。実際の匂いはどちらかと言うと塩素系に近いものだ。

私が受けた授業の中で記憶に残っているものがある。その教授は京都の旧家に伝わる古文書の整理を任されていた。ある夏の集中講義で室町時代の古文書を紹介してくださった。その中にこの「われもこう」を詠んだ歌があった。その時の資料もテキストも残っていないのだが、なぜか今も記憶のあなたに残る。男性が自分の思いを伝えるために「われもこう」を詠んでいたと覚えている。その時に聞いたのは「我も行こう」の意で詠まれた歌だった。五十年経った今でも、吾亦紅に出会うとあの頃が懐かしく思い起こされる。

この「われもこう」の音から「吾亦紅」と当てたり、香りをイメージして「吾木香」また先に述べた「吾も行こう」さらに「吾も恋う」などいろいろな意味を持たせていったのだろう。こうして多くの表現者は触発され、作品も生まれたのだ。このように植物の名前は奥深く面白い。

高濱虚子は「吾もまた紅なりとひそやかに」と吾亦紅の由来を詠っている。ひっそりと目立たない花ですが私も紅をまとった花ですよと地味な姿で訴えるのか。こうしたことから「吾亦紅」と書かれることが多いのも理解できる。

吾木香すすきかるかや秋草の さびしききはみ君におくらむ

若山 牧水

色といい姿といいあの静かで控えめな独特の立ち姿は実に味わい深い。こうした吾亦紅の健気な印象を詠んだ歌は珍しくない。